

# 『好色五人女』樽屋おせんをめぐる巷説について

堅 田 陽 子

はじめに

貞享三年（一六八六）刊『好色五人女』（以下『五人女』）は、実際の事件に取材する作品である。全五巻のうち、巻一と巻五は寛文年間の出来事とされており、『五人女』とは時間的な開きがあるが、巻二から巻四は、天和三年（一六八三）以降の事件を扱っている。直接的な記憶の薄い過去ではなく、その事件を目の当たりにした読者が多い当代の出来事を扱う場合、登場人物や事件の顛末に関する情報を作者と読者が共有しているため、共通認識があることを前提とした文脈となる。そうした文脈には、省筆が多い。周知の事実や情報について作品のなかで詳細に描写すれば、冗長なものとなるからである。

巻二の題材となった樽屋おせんの密通事件が起こったのは貞享二年の正月で、事件の発生と『五人女』の執筆

時期は近い。また、事件の舞台は大坂天満であり、時期だけでなく場所も『五人女』のなかで西鶴に最も近く、おせんの物語を執筆するにあたっては、様々な情報を持っていたことが推測される。しかし現在では、事件に関する記録類などが伝わらないため、密通として処罰されたこと以外に詳細な史実を知ることが難しい。ただ、大坂北郊の刑場野江で処刑されたことは確かで、貞享四年刊『野郎立役舞台大鏡』の序文には、「又、野江のよし原樽屋おせんがそばでとらへてきたうなぎも、くふ人がしらねば舌つゞみ、しらぬがほとけ、しるはうるさし」とある。

もっとも、事件の記録ではないが、巷説を伝える資料は残っている。本稿では、おせん事件を伝える歌祭文を中心に分析し、当時の巷説がどのように『五人女』に取り込まれているのかについて考察する。当代の共通認識とはどのようなものであったのかを踏まえることで、省

筆された文脈を補いながら巻二を読んでいきたい。

## 一、歌祭文「樽屋おせん」に関する巷説

### 一——王藤内が引用される謎

おせんの事件を扱う歌祭文は、三編が確認されているが、「色も香もなき糝花」と題する一編は「ありし昔や五十年」の文言がみえ、後代のものであるため、同時代的な巷説について考察する本稿では扱わない。まずは「樽屋おせん」と題する歌祭文からみていきたい。歌祭文は歌謡で口承文学的性格を持つものであり、冊子体で刊行される場合は複数をまとめた寄本となっていることが多いなど、各曲の成立や流布の時期が確定されにくい傾向にあるが、「樽屋おせん」の場合は、『五人女』に先行することが確認できる。それは、「樽屋おせん」とほぼ同じ内容を持つ異文が存在し、その異文「樽屋おせん」の詞章を、『五人女』よりも刊行時期の早い『好色三代男』（貞享三年正月刊）が引用していることによる。「樽屋おせん」は『五人女』よりもはやくに流布したおせんにまつわる情報であり、その内容を十分に理解しておく必要があるが、本文には不可解な箇所がある。

長右が寝たる月代に、足がさはればこは如何に。

「扱は不義者逃がさぬ」と、つかみかゝれば振り離

し、まはし片手に丸裸。大藤内が逃げ振りど、笑はぬ人こそなかりけり。（傍線筆者）

念仏講から帰った樽屋が長右衛門を発見する場面を引用した。長右衛門は樽屋に掴みかかられたのを振り放し、「まはし片手に丸裸」で逃げていくが、その様相について歌祭文では、「大藤内が逃げ振り」と表現している。

「大藤内」は『曾我物語』の登場人物、王藤内のことであるが、その逃げぶりとはどのようなものか、流布本『曾我物語』（巻九「わうとうないをうちし事」）を参照する。

かくて、あとにふしたるわうとうない、ねおびれて、「せんなきとのばらのやちうのたはぶれかな。あやまちし給ふな。人たがひし給ふな。人々をば見しりたり。後日にあらそふな」とはいひけれども、かたなをだにもとらずして、たかばひにしてぞにげたりける。十郎おつかけて、「昼のことばには似ざる物かな。いづくまでにぐるぞ。あますまじ」とて、左の肩より右の乳の下かけて、二つにきつてをしのけたり。

曾我兄弟が工藤祐経の館を夜襲した際、祐経の傍に寝ていた王藤内も討たれることとなる。傍線部からは、恐怖心からられる王藤内の様子が看取される。「たかばひ

(高道)は、『日本国語大辞典』に「尻を高くしてはうこと」とある。連想語に関する辞書『俳諧類船集』にも、「尻」の項目に「逃さま」とあり、逃げる際には尻が目立つものらしい。『義経記』には「腰や抜けたりけん、高道にして三方へ逃げ散る」(巻五「忠信吉野山の合戦の事」)の例が見られる。「樽屋おせん」の長右衛門が、「まはし片手に丸裸」でなりふり構わず逃げるのは、王藤内の「かたなをだにもとらずして」に通う。武士でありながら刀を取らずに逃げ出すのは、裸に等しい醜態といえよう。言葉を尽くさずとも「大藤内が逃げ振り」の一言で、長右衛門の情けなく無様な姿を表すことができるという意味では、王藤内が引用される理由を理解することができる。しかし、長右衛門と王藤内にそうした共通点があっても、「樽屋おせん」の文脈においては、長右衛門から王藤内を連想するのは、やや唐突の観がある。王藤内といえはその逃げ方の無様さが連想されることが多く、謡曲「夜討曾我」の間狂言、幸若舞「夜討曾我」、狂言「王藤内」などの例がある。また『俳諧曾我』(元禄十二年序)には、「這ふて入大藤内が負すまふ」(露川)の句も見え、王藤内が描かれれば、逃げるときの醜態を取りあげられることが多い。それが、「樽屋おせん」においては唐突に思われるのは、歌祭文の詞章として異例

の文飾であるためである。

心中事件など、当代性・報道性の濃厚な歌祭文では、その詞章に歴史上の著名人や古典文学の登場人物をとりあげるような文飾をほどこすことが少ない。「樽屋おせん」を収録する『日本歌謡集成』第八巻の「歌祭文集」に五十四編の歌祭文が載る(当代性のない「祝言高砂歌祭文」は省く)。そのうち、題材に直接的な関わりのない歴史上の人物などが文飾的に用いられるのは、「樽屋おせん」のほかに、「業平作りの優男子、曲輪に身をば打込みし」(「飛脚忠兵衛恋の重荷」)と「伝へ聞きにし唐土の、かの七賢と云ふ人の、琴詩酒三つを樂めり。賤山賤の我々は、琴ひく事も歌も知らで暮せど今一つ、茶碗酒をばひく事は、自然多年に覚えたり」(「彦三近江八景へしばうりやさし男」)の二例のみである。美男子の形容として在原業平を引き合いに出したり、山奥で酒を嗜むという行為から竹林の七賢を連想したりするのは、その分野の代名詞的な存在をあげるものであり、常套的な表現といえる。業平や七賢が、歌祭文の内容と関わりが希薄であったとしても、唐突な引用とは思われな例であろう。

「樽屋おせん」は悲劇の密通事件であり、仇討ちの軍記物『曾我物語』とは、共有する世界観が無い。また、

「大藤内が逃げ振り」とが無くとも、「まはし片手に丸裸」と「笑はぬ人こそなかりけり」だけで、十分に長右衛門の様子は伝わる。にも関わらず、おせんの物語に悲劇性が高まっていく後半部分に、事件と関わりが無い『曾我物語』の登場人物が引用されるのはなぜなのであろうか。

#### 一―二 浄瑠璃『世継曾我』とおせん

歌祭文「樽屋おせん」には王藤内が登場したが、『五人女』にも曾我物の一節が引用される箇所がある。

久七、寝ながら手をさしのぼし、行灯のかはらけかたむけ、やがて消るやうにすれば、樽屋は枕にちかき窓蓋をつきあげ、「秋も此あつさは」といへば、折しも晴わたる月、四人の寝姿をあらはす。おせん、空軒を出せば、久七、右の足をもたす。樽屋是を見て、扇子拍子をととりて、「恋はくせもの、皆人の」と、曾我の道行をかたり出す。

〔京の水もらさぬ中忍びてあひ釘〕

おせんと樽屋は仲人唄こさんの提案した伊勢参りの旅に出るも、出発時に居合わせた下男の久七まで同行することとなり、久七と樽屋の二人がおせんを争う珍道中となる。引用の場面は旅中の宿屋でのくだりで、おせん、こさん、樽屋、久七の四人が同室に寝転び、行灯のあか

りがすぐに消えるように仕掛ける久七の行動に不穏ものを読み取った樽屋が、暗闇を作らぬように窓を開けて月明かりを入れていいる。傍線部の「曾我の道行」とは、天和三年（一六八三）九月に京都宇治座で加賀掾が語り、翌貞享元年には大坂道頓堀で創設された竹本座で初めて上演された演目でもある、近松門左衛門作の浄瑠璃『世継曾我』中の虎少将の道行を指す。この道行は、貞享二年刊西鶴編の『小竹集』にも抄出された。<sup>〔作〕</sup>樽屋は、おせんを我が物にしようとする久七を牽制して、「恋はくせもの」とあてこすっている。また、貞享四年刊『好色旅日記』巻二に「恋はくせものみな人に、としは十七とうたはれし、女もこゝに消けらし」と、同じく『世継曾我』の道行を引用する例がある。引用中「こゝ」とは栗田口をさす。『好色旅日記』と『五人女』、恋による刑死事件を扱うものが、どちらも『世継曾我』の道行を引用している点は注目される。『世継曾我』は密通の物語ではないが、「さりとても、恋はくせもの、皆人の、迷ひの淵や気の毒の、山より落つる流れの身。うきねの琴の調べかや」と、恋による身の破滅を思わせる詞章によってか、<sup>〔行〕</sup>そうした刑死事件を連想している。

『世継曾我』は当時大変な人気を博し、「恋はくせもの」は特に愛唱された。享保十二年（一七二七）刊『今

昔操年代記』には、以下の記述が残っている。

浄るりは、嘉太夫致されし世継そが、是義太夫出世のはじまり。町中の見物、此ふし事になづみぬ。

げにうけがたき人のたいを受ながらと〈二段目待つ夜の恨〉

さりとは、恋はくせ物皆人のと〈三段目道行〉

立子這子、此二所のふし事、口まねせぬ者なし。

おせんの事件と道頓堀での『世継曾我』上演の時期は近かったので、樽屋がうたった一節は、当代の出来事を描いているという臨場感を読者に与える効果もある。しかし、樽屋に『世継曾我』の道行をかたらせた理由は、密通による刑死の暗示や当時の雰囲気演出するためだけではない。「樽屋おせん」と『五人女』の両方が『曾我物語』にちなむ素材を取り込んでいる背景には、さらなる事情がある。

『世継曾我』を参照すると、『曾我物語』ではなく『世継曾我』こそが、おせんの事件に関わる要素であり、またそれは周知のものであった可能性が考えられる。

『世継曾我』は、曾我兄弟の死後、鬼王と団三郎の兄弟や、大儀の虎、化粧坂の少将など、兄弟と関わりのある人物が活躍する物語である。その冒頭部分は、『曾我物語』巻十「五郎御前へめし出され聞めしとはるゝ事」

に描かれる頼朝と五郎のやりとりを材に採り、台詞も多くを『曾我物語』によるが、五郎が死んでからの展開は、近松の創作になる。ところどころ曾我物の謡曲などを撰取する箇所は認められるが、新開荒四郎と荒井藤太(『曾我物語』では「五郎丸」)を敵とし、これを討つべく曾我兄弟ゆかりの人々が動き回るといふ展開は、『曾我物語』には無い。

この『世継曾我』独自の部分に、「樽屋おせん」と類似する箇所がある。『世継曾我』第四段、虎と少将が祐若を養育する庵へ、新開荒四郎と荒井藤太がやってくる場面から見えていきたい。祐若とは十郎の遺児で、『曾我物語』には登場せず、近松の創出になる。新開らは鬼王と団三郎の復讐を恐れ、これを回避するために、曾我の郎等が十郎の遺児祐若を立てて將軍の命を狙っていると頼朝に讒言することを思い立ち、祐若を捕らえに来た。祐若を取られまいと、虎と少将は新開と荒井を口説く。

本より実なき事といひ、殊に名に負ふ虎少将。しつぽと口説くに二人の者たよ〜おろ〜ころりとして、「いやさ我々もふびんに思へば御前はいかやうにも成まじき事にてなし。去ながら、隣の心得次第」と言へば、少将聞給ひ、「いやなふ、悟れがましく宜ふが、其子だに助けて給はらば、わんざくれ比丘

尼をやめ、いかやうにも御兩人のお心に従はん」と  
誠しやかに謀れば、

祐若を取り返そうとする虎たちを見て、新開らはこれにつけこみ、虎と少将を我がものにしようとする。祐若を助けるために、少将は新開らの意に添うつもりのあることを述べるが、それが本心ではないことは傍線部からわかる。この展開は、「樽屋おせん」で息子の松の介を人質に取られたときのおせんと似ている。

「樽屋おせん」は、おせん密通の経緯について以下のように伝えている。「日頃おせんに恋の山」とおせんを横恋慕していた隣家の長右衛門が、樽屋の留守にやって来る。松の介の胸に七首をあて、おせんに「いやか応かの返事にて、悴をこゝで刺殺」すと、関係を迫る。松の介を助けたいおせんは、長右衛門の要求に応える振りをして、「兎角いつはり宥めつゝ、あとで思案を極めん」と、長右衛門の油断を誘いながら、助かる方法を模索していた。

このように、息子を人質に取られるという点だけでなくその対処法も、『世継曾我』の虎と「樽屋おせん」のおせんは似ている。

「樽屋おせん」は結末こそ悲劇となっているが、そこに至るまでは、『世継曾我』と同じような展開となつて

いる。おせん事件の舞台である天満とほど近い道頓堀で、この浄瑠璃が上演されたのは、時期も貞享元年と近い。そして『世継曾我』は、当時誰もが知る浄瑠璃である。

おせんの密通は息子を人質に取られての悲劇であったという巷説が存在し、その展開が『世継曾我』と似ていることから、「樽屋おせん」は『世継曾我』の倣をもたせて作られたのではないか。そうした経緯を想定すれば、「樽屋おせん」に『曾我物語』の登場人物である王藤内がよみこまれることは、おせんの事件と関わりがある文節となり、唐突の観は消える。

また、『五人女』巻二の章段構成には『世継曾我』が関わっているのではないか。巻二は五段に章立てされているが、その五章のうち一章から四章までは、おせんと樽屋の婚前に関する物語であり、密通事件については最終章でしか扱われない。『五人女』の題材に選ばれている女たちはいずれも、恋愛事件の主人公となった者たちであり、その女たちの物語をなすにあたっては、その事件の内容を中心に描くものであろう。現に『五人女』の他の巻では、女主人公の恋愛事件に関する描写が物語の大半を占めている。それが巻二では、一章から四章までおせんの密通相手となる麴屋長左衛門が登場せず、最終章に突如として現れる。必然的に、密通事件の一部始終

が、ひとつの章で簡略にまとめられることとなる。卷二は事件を題材としながら、事件そのものをほとんど描かない。しかし、『世継曾我』がおせんの事件譚の背景にあったとすれば、その理由を理解できるのではないか。

卷二の構成は、『世継曾我』の方法と類似している。『世継曾我』も五段に仕組まれるが、『曾我物語』の展開を取り込むのは初めの一段のみで、二段目からは、『曾我物語』のその後を近松が創作して見せている。西鶴は『世継曾我』の倅を持つおせんの物語を『五人女』で創出するにあたり、その話の構造を『世継曾我』から着想したのではないか。

二次創作的なところに主眼を置く『世継曾我』の方法を受け継ぎながら、後日譚を前日譚に切り替えて物語を描き出したところに、西鶴の発想と工夫がある。

## 二、歌祭文「いせさんぐう」に関する巷説

### 二―一 おせんの性情描写にみられる二面性

隣家の長右衛門がおせんの息子松の介を人質にし、無理を通そうとしたことによる悲劇を伝えるのが歌祭文「樽屋おせん」であるが、『五人女』のおせんは違う。

『五人女』のおせんは、長左衛門の妻の激しい愠気にあてられ、これに対する復讐心から思いつき、それが間も

なく自発的な密通へと向かっていく。

「おもへばくにくき心中、とてもぬれたる袂なれば、此うへは是非におよばず、あの長左衛門殿になさけをかけ、あんな女に鼻あかせん」と思ひそめしより、各別のこゝろざし、ほどなく恋となり、しのびくんに申かはし、いつぞのしゆびをまちける。

〔木屑の杉やうじ一寸先の命〕

長左衛門の妻へのいらだちが契機となり、おせんは長左衛門を「なさけをかけ」る対象として意識するが、その意識は「ほどなく恋となり」、「いつぞのしゆびをまちける」という状態となる。このように、『五人女』のおせんの密通は、おせんの意思もあって長左衛門を招き入れたことによる過失であり、「樽屋おせん」で被害者のおせんは、『五人女』では共犯者となる。そうした展開への布石であるかのように、『五人女』のおせんには好色性が描かれている。たとえば、伊勢参りに出立するまえのくだりに、次のような箇所がある。

おせんもあはぬさきより其男をこがれ、「物も書きやりますか。あたまは後さがりて御座るか。職人ならば腰はかゞみませぬか。爰出た日は、守口か牧方ひたに昼からとまりまして、ふとんをかりてはやう寝ましょ」と取ませて談合するうちに

〔踊はくづれ桶夜更て化物〕

おせんの言葉には、樽屋の男ぶりを詮索し、はやる気持ちが抑えられない様子が見受けられる。これは、『五人女』巻一でお夏が「其年十六迄男の色好みて、いまに定る縁もなし」(「くけ帯よりあらはるゝ文」)と評されたり、室の明神に「その方も、親兄次第に男を持ば別の事もなひに、色を好て、其身もかゝる迷惑なるぞ」(「状箱は宿に置いて来た男」)と告げられたりしたのと同類の、男を選り好みする「色好み」ではないか。

おせんに好色性が付与されているということは、「樽屋おせん」が流布していたという状況下にあつては不可解な設定である。「悪性者」のために密通の悪名を背負つて自害することになる「樽屋おせん」の物語は、悲劇性が強く、救いがない。世間がそのように認知しているおせんを、『五人女』は好色な女として描くが、そうした改変は読者にとって、面白く享受できるものなのであるうか。

巻二冒頭のおせんの人物紹介は、次のようになされている。

「此家におせんといふ女なふては」と諸人に思ひつかれしは、其身かしくきゆへぞかし。され共、情の道をわきまへず、一生枕ひとつにて、あたら夜を明

しぬ。かりそめにたはぶれ、袖つま引にも、遠慮なく声高にして、其男無首尾をかなしみ、後は此女に物いふ人もなかりき。

この「情の道をわきまへ」ないおせん像は、「樽屋おせん」にみられるおせんから発想したものであろう。こうしたおせんの態度に、婚前の樽屋は恋の辛さを仲間噂のこさんに述べて、「内かたのお腰もとおせんがく、百度の文のかへしもなき」という。これは、「樽屋おせん」の長右衛門の言葉「こゝなお内儀悉知らず。文は度々送れども、一度返事にあづからず」によるもので、『五人女』に「樽屋おせん」が取り入れられた形跡といえる。『五人女』にとって、「樽屋おせん」は無関係ではないし、哀れな被害者としてのおせん像を無視しているわけではない。

西鶴には、典拠を用いてもそれをただなぞらず、改変を加えて新しい物語を作り出す傾向があり、この方法に類するものは諸研究において指摘され、西鶴が多用する方法といえる。しかし、典拠や情報の改変を見出すならば、そこにどのような文学的効果があるのかを考えねばならない。「樽屋おせん」と『五人女』のおせん像の落差には、どのような面白さがあるのか。



## 二―二 おせんの事件を伝える資料の再検討

西鶴によるおせんの描き方について考えるために、おせん事件にかかわる言及がみられる諸資料を検討したい。『好色訓蒙図彙』（貞享三年三月刊<sup>〔註13〕</sup>）、『好色破邪顕正』（貞享四年五月刊<sup>〔註14〕</sup>）、「〈長右衛門よざかり〉おせんいせさんぐう」（貞享三年刊の寄本の一<sup>〔註15〕</sup>、以下「いせさんぐう」）の三つの資料を取り上げる。これらを検討すると、『五人女』で西鶴が形象してみせた好色な女というおせんの一面が、『五人女』が執筆されるよりも早くから世間に存在したことが推測される。まずは、『好色訓蒙図彙』から見ていきたい。

おもわくの中川に思按ばしがあれども、遣曲のふちにしづんでから、はいあがる手くだもなし。色こそ人のほだしなれとすましたあたりえは、気もなひならずとも、せめてぬし有手をとるな。やれてをとるな。万法一心、諸芸のうはもり、男の一道これ也。女ははなのさきにして、ほれたといふをうれしがらぬもなく、うらなく人にさへ語てよるこぶ也。是いたづらものゝ真たゞ中、絵草紙たね。男のつらよし。じたひおせんはだてこきこきじや。ぬけ州じや。

本文には「密夫（まおとこ）」の題字がある挿画が付され、同衾する男女と、その場に踏み込んだ夫が描かれ

る。刀を持つ夫に女は手を合わせ、許しを乞う仕種をしている。傍線部には「おせん」の名が見えるが、「樽屋おせん」での描かれ方とは全く違い、単なる好色者、ないし愚か者となっている。『好色訓蒙図彙』の刊行は『五人女』より一ヶ月後であるが、そこに描かれるおせん像は『五人女』を参考にしたものとは考えにくい。本文には、おせんの好色性以外に共通点や関連する記述がなく、『五人女』の影響が見いだせない。本書の著者である山雲子<sup>〔註16〕</sup>は、『五人女』とは関係なく、樽屋おせんの事件を右のように理解していたのであろう。

また、『好色破邪顕正』を見ると、団水も山雲子と同じように、おせんの事件を捉えていたことがわかる。

もし其ものさへ墮落した程に、我もせいではといふやからは、大経師の蜜夫、樽屋の間男も磔にかゝつた程に、我も同じく不義をして、刑戮に逢べしといふに似たり。

ここに見られる「樽屋の間男」は、樽屋おせんの事件を指す。「大経師の蜜夫」と「樽屋の間男」を並列しているが、男女双方に責任があるという点で通常の密通事件である大経師おさんと、長右衛門を悪者におせんを被害者に描く「樽屋おせん」を同類に扱っては、修辭が成立しない。団水は樽屋おせんの事件を、歌祭文「樽屋お

せん」のような同情すべき悲劇とは捉えていなかったことがわかる。また、そのような団水の認識が、『五人女』の影響によるものとも考えにくい。もしおせんの巷説が、「樽屋おせん」のようにおせんを被害者として伝えるものしか存在せず、好色性のあるおせんが西鶴による独創であったならば、そのようなおせん像は『五人女』のなかでのみ成立する特別な人物像ということになる。特定の作品の中に生きる特別な人物像は、このような比喩的修辭として機能しない。『好色破邪頭正』で団水が「大経師の蜜夫」と「樽屋の間男」を並列し、これについて何らかの説明を加えずとも文飾が成立しているということは、二つの事件を並列する団水の見方が、世間の共通認識と変わらないことを示している。

歌祭文「樽屋おせん」にみる哀れなおせん像は、世間がおせんに持っていたイメージの全てではなく、「樽屋おせん」とは似ても似つかぬ、好色者としてのおせん像が、ほぼ同時期に流布していたのではないか。そして、好色者おせんの人物像がどのようなものであったのか、その具体については、別の歌祭文「いせさんぐう」に見ることが出来る。

「いせさんぐう」は、『おせん長右衛門』いせさんぐう』の外題をもつ寄本（貞享三年成立）に収録される。

内容は、おせんと長右衛門が伊勢参りを口実に不倫旅行へでかけるというもので、大坂から伊勢までの道行となっている。「かくてかうじや長右衛門は、おせんつれてのさんぐうは、しゅしやうにもまたうはきなり」と語りだし、天満を出て野江の刑場に至るところでは、長右衛門の言葉に「おつと片町野田町を、すぎてこゝこそ野江口よ。おないぎ、なふく／＼おせんどの、悪人あるひは不義者は、こゝにおきめの所なり」とある。二人は滞りなく伊勢参宮を終え、「みやげものなどゝのへて、かへるも同じいせ町に、げかうあるこそよざかりよ」と本文は結ばれる。「いせ町」は、『大阪府の地名』（I、平凡社）に「天満堀川左岸の堀川町の北に接続する片側町と、その西側の両側町」と解説される町名があり、『五人女』においてもおせんが住んでいたとされる天満の地名であることから、この伊勢町のことであろう。本文中、密通の露呈を恐れる文言はみられるものの、伊勢参りに出かけたおせんと長右衛門は、何事もなく元の生活に戻っている。

「いせさんぐう」を収める寄本の成立は貞享三年であるが、三月八日に没した鈴木平八追善のおどり念仏を所収しているので、二月刊行の『五人女』よりは後のものとなる。このために、『五人女』よりも早い流布が確認

できる「樽屋おせん」と違い、『五人女』との関係が論じられにくいものとなっているが、「いせさんぐう」は『五人女』を読みとくにあたり念頭に置くべきものである。おせんと長右衛門が二人連れで伊勢参宮に出かけ、もとの大坂に帰って行くという「いせさんぐう」のあらすじは単純なものであり、テキストのこうした性格を捉えて、塩村耕氏は「こういう場合、より素朴な話が古いと見るべき」であり、「おそらくは姦通事件から連想される不倫旅行の噂が先にあつたはずで、西鶴はその話を承知の上で、あえて読者に別の説を提示して見せたので」はないかとする。<sup>(注17)</sup>「いせさんぐう」は、『五人女』よりも前に流布した噂なのではないか。「樽屋おせん」と様相は全くちがうが、ほぼ同時期に、おせんの密通事件は様々に取りざたされていたのであろう。「いせさんぐう」のような噂が共通認識としてあつたとすれば、『好色訓蒙図彙』や『好色破邪顕正』が好色者の仕業としておせんの事件を取り扱うことも了解できる。

『へおせん長右衛門』いせさんぐう』の題簽の脇書に「新五人女」とあることから、西鶴の『五人女』に倣った本であるとの印象が持たれやすいが、寄本の成立の問題と、所収する各歌謡の成立については分けて考えるべきで、「いせさんぐう」が『五人女』を取り込んでいる

とは限らない。<sup>(注18)</sup>『五人女』のおせんに好色性の強い描写があるのは、「いせさんぐう」が伝えるようなおせん像が『五人女』より早くに広まっており、その噂の存在を考慮したためであると考える。おせんには、哀れな貞女と好色者という正反対の人物像が既存し、この二つを作品に取り込んだことにより、『五人女』のおせんの性情はその両方を行き来したのであろう。複数の噂があることを知る当時の読者であれば、その趣向が面白く読めるはずである。

『五人女』巻二には笑いの要素も多いが、その笑い作りは面白ければいいというものではない。おせんの好色性も密通の愚かしさも描くが、その程度を誇張することはず、事件をまとめている。男女どちらか一方を悪者にすることもない。おせんの密通のきっかけは、長左衛門の妻への対抗心という軽はずみな出来心であった。しかし、そうした女の意地が、「各別のこゝろざし、ほどなく恋となり」となるように、おせんの心は恋情へと変化している。『五人女』のおせんの密通は、異常者による犯行ではなく、誰もが陥りかねない状況の蓄積がもたらした結果として描かれている。また密通に及ぼうとする場面では、「ないく約束、今」といはれて、いやがならず内に引入」とあり、「いやがならず」には、お

せんの後悔や迷いといった感情が読み取れる。『五人女』は、巷説とは異なり、同情を誘うような悲劇性に特化した物語でなく、おせんの間像も、密通に及ぶときでさえ大胆な好色者とはいえない。西鶴の人物造型は巷説よりも現実的で、人間の心のありようが丁寧に描かれている。

## おわりに

本稿は、当代的にはどのようにおせんの事件が享受されていたのかについて考察した。その結果、『世継曾我』の大磯の虎が重ねられ、悲劇の主人公として哀れまれたおせん像と、密通相手と伊勢参りに出かけるような好色者の側面が取りざたされたおせん像、その両方にかかわる巷説が存在したことを推定した。実際の事件に取材する『五人女』は、そうした巷説をこそ材料としながら物語化されたはずであるが、性質の異なる巷説を複数用いながら、矛盾のない一話にまとめるのは、たやすいことではない。西鶴のすぐれた構成力がよく表れた作品といえる。

## 注

(1) 本文は『西鶴選集』好色五人女(影印)〔平成七年、おうふう〕による。適宜、新漢字や濁点をあて、句読点を補うなど、本文を改めた。以下、諸作品から引用する際には同様に加工する。

(2) 本文は、東京大学附属図書館、電子版霞亭文庫の画像データによる。引用中の「よし原」は天満の地名「葎原町」のこと。

(3) 「樽屋おせん」は上編名で、下編名は「樽屋おせん」恋の桃花」。本稿においては上下編をまとめて「樽屋おせん」と呼ぶ。本文は『日本歌謡集成』(巻八、近世編、昭和三十五年、東京堂出版)による。また、東京芸術大学附属図書館所蔵『当流歌祭文』所収の「樽屋おせん」と校合したが、当該本は墨付きのため判読不能箇所が多い。可読箇所若干の異同が見られるが、内容に関わるものは認められない。

(4) 本文は、新潟大学附属図書館佐野文庫本で確認できるが、当該本は破損がはげしく、上編は冒頭部分しか確認できない。上編の冒頭と下編の末尾をのぞき、「樽屋おせん」(注3参照)とほぼ同内容。

(5) 本文は、国立国会図書館デジタル化資料『曾我物語』(寛永四年刊)による。流布本(整版本)。

(6) 『俳諧類船集』(近世文藝叢刊、第一卷、昭和四十四年、般庵野間光辰先生華甲記念会)。

(7) 『義経記』(日本古典文学大系37、昭和三十四年、岩波書店)。

(8) 『蕉門珍書百種』(昭和四十六年、思文閣)。

(9) 前田金五郎『好色五人女全注釈』(平成四年、勉誠社)。

(10) 前田氏前掲書(注9)に指摘。本文は東京大学附属図書館、電子版霞亭文庫の画像データによる。

(11) 『近松浄瑠璃集』(上、新日本古典文学大系91、平成五年、岩波書店)。一部、漢字表記をひらがなに改めた。

(12) 『新群書類従』(第六、明治四十年、国書刊行会)。

(13) 野間光辰『〈刪補〉西鶴年譜考証』(昭和五十八年、中央公論社)に指摘。本文は『好色物草子集』(複製・解説、近世文芸資料第十、昭和四十三年、古典文庫)。

(14) 『好色物草子集』(本文・索引、近世文芸資料第十、昭和四十三年、古典文庫)。

(15) 『山邊道』(祐田善雄先生華甲記念、第十五・十六合併号、昭和四十五年、天理大学国語国文学会)。寄本の成立は貞享三年であるが、刊行年については、正徳二年改めより高額な駄賃付けの記載から、入木による享保後半頃の改修版と推定される(塩村耕「古版『伊勢道中記』(下)」

『東海近世』、七号、平成七年)。

(16) 塩村耕「西鶴同時代の隠者作家山雲子の新たに判明した著述」(『日本古書通信』九六三号、平成二十一年)。

(17) 塩村耕「西鶴と実録」(『江戸文学』二十九、平成十五年)。

(18) 野間氏は『へおせん長右衛門』いせさんぐう』の脇書「新五人女」について、「これは全く、西鶴の『五人女』に對して『新五人女』と命名したのではなく、同じ歌祭文の寄せ本に『五人女』と題するものがあつたからであらう」とし、「西鶴の『好色五人女』述作の動機も、かうした歌祭文に刺激せられ、その寄せ本『五人女』に想を得て構想したのではなかつたか」と述べている(『〈刪補〉西鶴年譜考証』)。

(付記) 本稿は、平成二十年度東海近世文学会十月例会(於熱田神宮文化殿)の口頭発表をもとに作成しました。発表の際に御教示を賜りました皆様に深謝申し上げます。

(かただ・ようこ/名古屋大学大学院博士課程後期)